

日本活断層学会 2017 年度秋季学術大会開催報告

日本活断層学会 2017 年度秋季学術大会実行委員会

2017年11月24日（金）・25日（土）・26日（日）、広島大学東千田未来創生センターにおいて、日本活断層学会 2017 年度秋季学術大会が開催された。参加者は、会員 88 名（うち学生会員 10 名）、非会員 33 名の、計 121 名であった。一般研究発表は、口頭発表が 16 件、ポスター発表が 26 件、高校生ポスター発表が 3 件行われ、シンポジウム「今後の研究の展望—学会創設 10 周年記念—」、2017 年度フォトコンテストの作品展示、また表彰式、懇親会、最終日には巡検も行われた。

24 日（金）は午後からの開催で、東千田未来創生センターM401、M402 講義室にてシンポジウムが開催された。このシンポジウムは会員向け（非会員も参加費を支払えば聴講可）という位置づけで開催された。これまでの活断層研究や活断層学会の活動を振り返るとともに、今後の研究や学会の取り組みに対する想いや提案を講演者に発表して頂き、関連分野間の情報交換や議論を行うとともに、既存の学問領域の壁を越えた学際的な研究の推進を模索することをめざした。講演に先立ち、広島大学の後藤秀昭氏によりシンポジウムの趣旨説明が行われた。題目と講演者は、以下の 13 件である（いずれも招待講演、敬称略）。日本活断層学会 10 年の意義（鈴木康弘）、主要活断層帯から生じる一回り小規模な地震と連動（近藤久雄）、平成 28 年熊本地震の「お付き合い断層」が提起した「地震断層」の多様性（宇根 寛・中埜貴元・藤原 智）、沿岸の地形・地質から読みとく断層活動（宍倉正展）、日本列島の第四紀地殻変動の解明に向けて：現状と課題（石山達也）、活断層研究の将来について（続）（中田 高）、変動地形学—パラダイムの転換を目指して（宮内崇裕）、歴史地震研究の現状と未来（西山昭仁）、強震動予測の分野から期待する研究（関口春子）、原子力発電所敷地内破碎帯の調査に関する有識者会合（島崎邦彦）、エンドユーザーからみた都市域における活断層情報の現状と課題（越後智雄・北田奈緒子・井上直人・伊藤浩子・濱田晃之）、三重県における活断層調査と普及の取り組み（奥野真行）、活断層資料の集中的な保管・収集に向けた資料館の必要性（岡田篤正）。

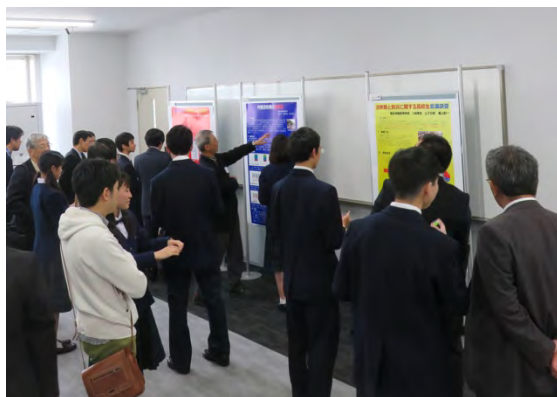
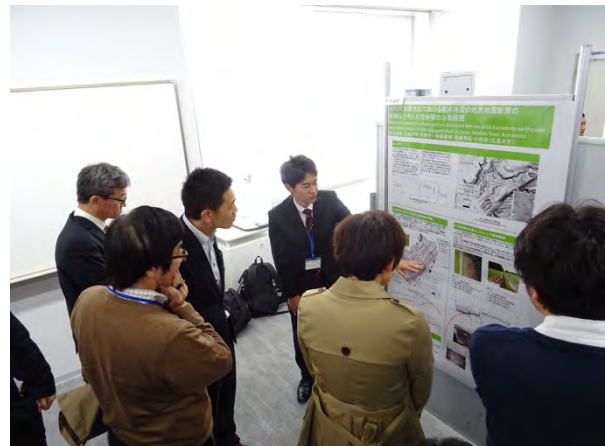


シンポジウムの様子

以上のように、学会の足跡を振り返り今後の道筋を示す発表、活断層研究の最前線を紹介し、今後取り組むべき課題の提示、関連分野からの活断層研究に対する期待と提案、活断層情報を利用するユーザーからの要望、研究資料の保存の必要性を提起する報告など、活断層研究や学会の取り組みの裾野の広さを感じさせるシンポジウムとなった。

参加者のアンケートにも、おおむね広範にわたる活断層に関する話題を聞いたことに対して好意的な意見が多かった。一人当たりの発表時間が短かったことに対する意見もあったが、これも興味深い発表が多かった所以とも受け取れる。内容に関する意見としては、岡田氏の活断層博物館構想や鈴木氏の会員への情報のフィードバックに関する賛同が多かった一方で、活断層研究のガラパゴス化を懸念する意見も複数見られ、宮内氏が指摘した多分野との融合への努力が必要との意見も多く見られた。

25日（土）の9:00～11:00 および13:30～17:10には、同じくM401、M402講義室において一般研究発表（口頭）が開催され、16件の発表と質疑応答が行われた。2016年熊本地震に関連した研究、活断層近傍の地震動、震源断層モデルと活断層の関係、日本各地の活断層に関する発表などがあつた。一般研究発表（ポスター）は、25日（土）にM303講義室で開催し、25件の発表があつた。2016年熊本地震に関わる発表、フィリピン、インドネシア、アフガニスタンなどアジア各国の活断層に関する発表、日本列島各地の活断層に関する発表、海底地形と陸上の地形を統合して変動地形を検討する発表などがあつた。11:00～12:00のコアタイム以外にも、ポスター前で議論する姿が多く見られた。また今大会での試みとして、高校生ポスター発表を募集したところ、北九州市にある明治学園中学校・高等学校から3件の応募があつた。地震と防災に関する高校生へのアンケート調査、小倉東断層沿い

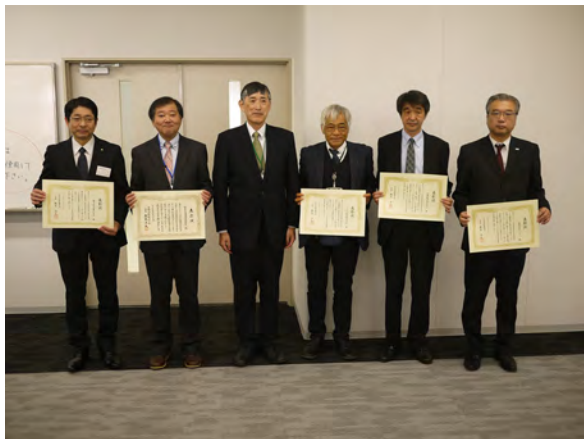


左上：一般研究発表（口頭）、右上：一般研究発表（ポスター）、左下・右下：高校生ポスター発表



の建築物の耐震構造、福岡県内の活断層沿いにある公共財に関する発表などが行われ、いずれも高校生自ら調べた研究であり、多くの参加者からコメントやアドバイスをもらっていた。2017年度フォトコンテストの作品展示も、24日（金）13:00頃から25日（土）15:00頃まで、M401、M402講義室前のロビーにて行われた。

25日（土）13:00～13:20には、M401、M402講義室において、学会賞、論文賞、若手優秀講演賞および2017年度フォトコンテストの表彰式が開かれ、それぞれ熊木洋太会長から賞状が授与された。学会賞には、2016年熊本地震直後から航空写真や解析データを、ホームページ等を通じて公開し活断層研究への情報提供に大きく貢献した、国土地理院・朝日航洋株式会社・アジア航測株式会社・国際航業株式会社・株式会社パスコの各機関・会社が受賞した。論文賞として、活断層研究44号に掲載された「浅海用高分解能三次元音波探査システムの開発とそれによる駿河湾北部沿岸海域の活断層調査」（著者 村上文敏・古屋昌明・高橋英二郎・丸山かおる・畑山一人・武田伸勝・佐藤正良・馬場久紀の各氏）が、今後の活断層研究の対象・見方を広げる論文として受賞した。若手優秀講演賞には、以下の4件の発表に対して授与された。「2016年熊本地震で出現した地表地震断層と活断層の離隔距離の定量的検討」（今野明咲香氏）、「益城町堂園地区における熊本地震の地表地震断層の詳細な分布と共役断層の活動履歴」（岩佐佳哉氏）、「テクトニックバルジの内部構造と発達過程-熊本県南阿蘇村立野地区におけるUAV調査-」（高橋直也氏）、「地表地震断層近傍における被害の特殊性について-1927年北丹後地震を事例に-」（高山正教氏）。2017年度フォトコンテスト入賞作品の内訳は、最優秀賞2作品、優秀賞2作品、入選4作品、特別賞1作品である。特別賞は、大会中の投票により選出された。



左上：学会賞受賞団体の代表者、右上：論文賞の表彰式、左下：若手優秀講演賞受賞者、右下：フォトコンテスト入賞者

懇親会は、24日（金）18:15～20:15、グランドプリンスホテル広島2F瀬戸内において開催された。松多信尚行事委員長の司会のもと、熊木洋太会長の挨拶に続いて、岡田篤正先生から乾杯のご発声を頂戴した。しばし歓談の後、学会賞を受賞した機関や会社の方からの受賞にあたってのコメントや、シンポジウムの発表者に、自身の発表に関するコメントを発表して頂いた。最後に2017年秋季学術大会実行委員長熊原康博氏の挨拶で散会となった。



懇親会の様子

26日（土）9:00～16:00には、「平成26年8月広島豪雨災害の被災地及び岩国断層帯の断層露頭と変位地形」の巡検を行った。巡検は、有限会社芸州観光の企画ツアーとして実施し、参加者数はバスの定員となる26名と盛況であった。巡検案内者は、楮原京子（山口大学）、松木宏彰（復建調査設計 株）、山内一彦（山口県立岩国高校・広島大学）、熊原康博（広島大学）の各氏である。午前中は、平成26年8月広島豪雨災害の被災地である広島市安佐南区緑井八木地区へ行き、国土交通省太田川河川事務所副所長 大久保雅彦氏の案内により、上山川（広島西部山系303溪流）の工事現場を見学し、工事の概要を伺うと共に土石流堆積物の露頭を観察した。午後は、大竹断層の断層露頭を見学した後、岩国ロープウェイで山頂まで上がり、岩国断層や岩国デルタの地形を眺望した。天候にも恵まれ、参加者は、住宅地で生じた自然災害の様子や岩国断層帯の活断層の特徴について理解を深めた。



左：上山川の工事現場での露頭観察、右：錦帯橋をバックに参加者の記念写真

最後に、巡検に際して工事現場の立ち入りを許可して頂いた国土交通省太田川河川事務所、本大会の準備・運営にご尽力いただいた学会事務局、アルバイトを引き受けて頂いた広島大学大学院教育学研究科社会認識教育講座地理ゼミの大学院生をはじめ、関係する方々および機関に深く御礼申し上げます。